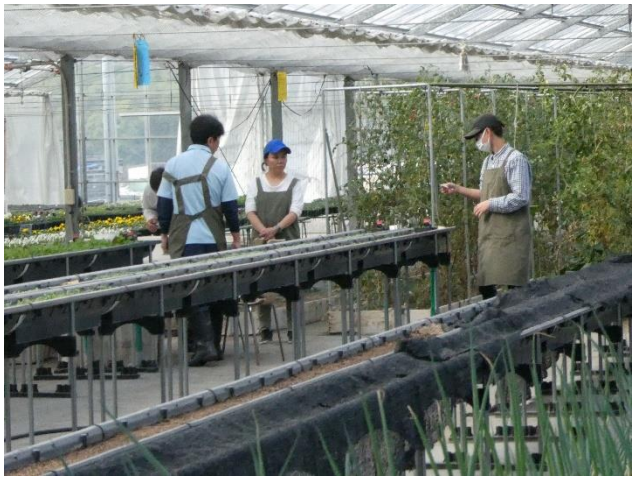
園芸療法から始まった農福連携

花卉園芸　長谷川（三木市）



経 緯

・オーナーの長谷川いづみさんは、33年前に「山田錦」と「花卉」の生産農家であった実家の跡を継ぐことを決心。以降、花壇苗や野菜苗のほか山田錦などの水稲を栽培している。
・園芸の仕事に携わり、注目され出した「園芸療法」に興味を持っていたところ、兵庫県立淡路景観園芸学校の存在を知る。全寮制のみであった園芸療法課程に通学コースができたことを契機に入学。2012年から2年間同校で学び、兵庫県知事認定園芸療法士の資格を取得。
・2017年に兵庫県園芸療法定着促進事業の一環として、神戸市北区の「NPO法人ひやしんす」で園芸療法を行う。その後、週に3日間、利用者数名を受け入れる。
・2023年には、新たに三木市内の2か所の事業所から受け入れを開始。現在の利用者は、7名。

取組内容

・花壇苗と野菜苗を栽培する９棟のハウス（30ａ）を運営するほか、水稲（山田錦、キヌヒカリ　計 3.6ha）と露地野菜（30a）を運営している。利用者は、土入れ、播種、苗運び、定植、潅水、収穫、箱詰めなどの作業に従事。
・通年就労できるよう、種をまいてから収穫までの期間が短く、施設内なら季節や天候を問わず1年中栽培できるベビーリーフの栽培を取り入れたり、立位・座位・車椅子での作業を想定して３段階の高設ベンチを設置（栽培槽を作業しやすい位置に設置）するなど、受け入れ態勢を工夫。
・利用者のスキルは徐々にアップしており、達成感と満足感が得られることから、積極性が増すと共に、生活リズムも整い出すなど好影響がある。

今後の展望等

・農福連携は、労働力としての役割だけでなく、利用者にとってはステップアップの場でもある。農業者側と福祉側の双方にとってWin-Winの関係でありたい。
・農の多面的機能の1つに「医療・介護・福祉機能」がある。障がいのある方だけでなく生きづらさを感じている人や高齢者にも農業を介して地域や社会が変わり、生きやすい社会に繋げる役割を持ち続けたい。
・そのためには、農業者と障がい者といった当事者のみならず地域の関係者・関係機関と連携すれば、点から線へ、線から面へと広がるのではないか。

2023年10月17日調査